のであつて全く別人の如くなつた。

又た序錄中に擧げた名醫の名殷淵源の如きは今本に商仲堪に作り唐太祖の諱淵を避けて新修本草に殷仲堪とされ宋本草には更に其姓殷を宋太祖の諱匡胤を避けて終に商仲堪とされたもので姓名共に改められた最も極端な惡例である。

此の外に陶註に竟の字は多く畢に作り恒山は常山に作るの類宋本草の改めたる所もある。

凡そ此等の例は唐抄本から宋槧本を經た支那古書を讀むものが記憶せねばならぬことであつて、單に本草經のみの問題でない。今日宋槧本既に稀覯に屬するのであるから本書の如く明かに唐宋の剏撰に係るものを其原以前の文に溯り得るのは文獻學上頗る重大な意義を有する譯である。

足利學校の盛時と西教宣傳

文學博士　新村出

一

足利學校が其の學風を以て日本の文敎界に重きを成したのは、戰國時代までであつて、天正十九年豐臣秀次が東征の時に於て、書籍什器を收むると共に、痒主三要をも隨へ來り、上國の文運に資するの機を作つた以來といふものは、學校は單に關東の一鄕校たるに過ぎざる有樣に成下ると共に之に反して珍籍の秘庫としての價値が、德川時代を通じて、益〻高まり、其の盛名は明治大正の近時にまでも失はれないやうになつた。一言すれば德川時代文運興隆の以前までは、足利學校は學校

としての價値が十分であつたのが、その以後に至つては、文庫卽ち學校附屬圖書館としての資格しか日本の學術界には保たれないやうになつたと云つてよいのである。

德川氏の初期に於て既に堀杏庵林羅山の如き鴻儒が足利學校を訪ねたことがあり、貞享年間には貝原益軒の如き敎育家が立寄つたことなどもあつて、その中羅山は文庫所藏の五經註疏に注目したこともあるけれど、藏書が學者や好書家の間に知られて、研究家の訪書を促がし考證家の校勘に資するやうになつたのは德川中期以降の事柄である卽ち寶永年中中村富平の辨疑書目錄（卷八）に足利本書目三十九部を著錄したのが、蓋し江戸の學者を刺戟した原由ではなかつたかと思ふ。續いて享保年間山井根本、物門の兩儒が足利に至りて、二人協同して七經孟子を校勘し、一人は皇侃の論語義疏を謄寫して歸つた。七經孟子考文補遺は幕府の儒員荻生觀が命によつて編輯して享保十六年に出版し、論語義疏は寛延三年撰文服部南郭の序を以て刊行された。その外享保十七年太宰春臺が出版した古文孝經も足利本に據つたものであつた。後年安永天明年間、清朝の乾隆四十年代に至つて、古文孝經が漢土に渡つて知不足齋叢書に收めて刊行され、七經孟子考文補遺が四庫全書に編入されるやうな勢で、足利學校の文庫は爾來支那本土にも喧傳されることとなつた。天明寛政以降、足利本の名、益〻我國の學界に高きと共に、寛政の末足利學所傳文明年中の影鈔本によつた泰軒易傳が林述齋の佚存叢書第二帙に收めて活刷され、降つて弘化の末足利本を以て松崎慊堂が寫した影宋本尙書正義が熊本藩から出版されたやうな複製事業が起つた。後者は出版の翌年長崎から支那に輸出された。前者も叢書全體と共に彼土に傳はつたに違ひない。かくて足利文庫は明治以後に至つては、

人も知る如く楊守敬黎庶昌の如き好書家を引きつけ、逸書百篇今尚存することの僞りならざることを支那人に愈深く知らしめた。

斯くの如く足利學校は、學校としては既に生命を失つてゐた德川時代の後期以來、その貴重な文庫によつて支那の學者間に響きわたるやうになつたが之に反して講學所としての活力最も旺盛であつた戰國時代に於ては、當時日本に弘布を始めつつあつた南蠻吉利支丹の宣教師によつて、事實以上の價値を認められて本國に報告され、布教史に載錄され、歐洲の大學（ユニバーシチー）や學院（アカデミー）に比せらるゝの榮譽を有したのである。この事は、世の足利學校を攻究する者に見逃がされてゐるやうであるから、一異聞として茲に紹介するのであるが、蓋し同校講學の影響の及ぶ所としては、特筆大書すべきことではないかと思ふ。且つ遠西の宣教師は、足利學校に過大の價値を置いたから、その出身者を聘用して、西教宣傳に資することを企てた形蹟もあるのである。以下それらの事を叙述して見よう。

二

足利學校の事が宣教師に知られたのは、耶蘇教渡來の劈頭からである。而も聖シヤヰエル上人が鹿兒島に到着後初めて發した日本第一通信に見えてゐる。今コールリッヂの英譯本にてシヤヰエル書簡集第二冊（一八七六年第三版による）を繙くに第五卷第一章中に見ゆる第七十九信が、上人の日本よりの第一信であつて、それは西紀一五四九年十一月五日、又は十一日、天文十八年己未十月六日又は十二日鹿兒島發、印度臥亞の耶蘇會へ宛てたものである。但し其の鹿兒島來著は同年陽曆八月十五日陰曆七月十二日のことであつた。さて右の書信の一節（二五七頁）の略に云く、

京都（ミヤコ）には有名なる一の大學（ユニバーシチ）あり、尚又五つの主要なる學林（カレーヂ）と二百有餘の僧院（モナステリ）とあり、……京都（ミヤコ）の大學の外、日本には

其他の五ヶ所に主なる學院存すコーヤ（高野）ネゴ（根來ヒソ）（比叡山）及びオーミヤ（近江、恐くは三井寺ならん）、この四つは京都の周圍に互に相近く位し、各三千五百の學徒を有す。これらの外、坂東の學院あり、日本國中最も大にして最も有名なり、而も京都を距ること甚だ遠し、坂東は一大領土にして、六人の小主之に割據し、その中一人最も勢力あり、……

右に云へる坂東の學院とは、足利學校であらうと思ふ。京都の一大學五學林とは何々を指すか。恐くは五山などの禪刹を稱するものに違ひない。通信文にはなほつゞけて學院のことを書いてある。二五九頁に云々、

明年（一五五〇、天文十九年）中には、京都の事情や諸大學の事や耶教關係の報道を詳細に書送らん。本年印度に渡航して我が教の秘奥を學ばんとする幾多の日本人のうち、京都及び坂東の大學にて教育を受けたる二人の僧侶あり、

この二僧のことは、シャヂエルの別信に屢見え、又布教史にも錄せられてをるが、今はそれは後に讓り、足利學校の位置に關する上人の記載と、それに伴ふ上人の注文とを報告しよう。

書簡集第五卷第三章中なる第八十六信は、上人が印度のコチンより歐洲の耶蘇會へ宛てたもので一五五二年正月二十九日、天文二十年十二月二十五日附であるが、その中に云ふ（第二册三四五頁）

坂東の大學は、日本の一島に在り、……諸大學中最も有名なり多數の僧侶その教法を學ばんとて絶えずかしこに至る、……

同時に羅馬のイグナチウス・ロヨラに宛てた第八十八信（三六九頁三七〇頁）にも、諸大學の價値を力說し、

主要なる坂東の大學は、日本諸島中最も北部に位せり、……予慮思へらく、白耳蒙人又は日耳曼人にして、葡萄牙語さては西班牙語を知る者で此地の宣傳に好適すべけむと、此等二國の者は能く勞苦に堪へ、又坂東の寒氣に耐ふる素質訓練を有すればなり、

數日後葡國コインブラ學院なるシモン・ロドリゲースに宛てたる書信即ち書簡集第八十九信（三七五頁）に於て、更に同樣の旨を縷述してをる。

坂東其他の諸大學に於て、僧侶より宣教師に對して大なる攻

擊大なる迫害を與へらるべきこと期待せらる、坂東は山口より遙に北方にあるを以て、宣教師は酷寒に堪へざるべからず、又彼地は米穀蔬菜類の外、食ふべきもの殆ど絶無なるが故に、彼等は食物の缺乏を忍ばざるべからず、……予惟ふに、白耳義人及び日耳曼人は、寒氣に慣れ、身體の强健に富るゝことなれば、彼等を派遣せんこと然るべし、……坂東の大學には四方より攻學の徒雲集す、かくて學徒その鄉國に歸るやおのが學びたる所を以て鄉人に授くるなり、予の聞く所に由るに、坂東は一大都會にして人口繁殖し、その住民は血統尊く武勇剛さを以て譽あり、而も溫和の性情を認むるを得とかや、希くは有德課讃の法友を此地に遣るやう配慮あらんことを、

日本に渡來せん者どもが、諸大學に至りて種々の困難に遭遇すべきことを概就せんか彼等はそれよりそれへと幾多の質問論議を以て斷えず攻めかけらるべく民衆の愚弄を受け各人の嘲笑を被むるべきことを心得ざるべからず、彼等は思索冥想の暇も彌撒を述ぶる餘裕もなかるべし、殊に坂東と京都とに於ては、聖教の日課を吟誦するの寸暇すらも得がたかるべし

以上の抄譯によつて、シャヰエルがいかに坂東の學院なるもの、卽ち足利學校を重大視して、之に對する方策を考へ、同校出身僧侶の論難を憚つてゐたかを知ることが出來よう。無論誇大に考へた點もあらうし、歐洲より新に宣教師を招致する爲に稍誇張した點がないでもなからうけれども、かゝる評價の生じたのは墨竟天文時代に於ける足利學校の學風の反響とも見得べく、以て當時、京都なり山口なり西國なりに同校の名がいかに高く揚がつてゐたかを知ることが出來よう。但しシャヰエルは西紀一五四九年及び一五五〇年卽ち天文十八九年に亙る一年有餘の間鹿兒島に滯留して島津氏を賴んでゐたがそれより平戸博多を經て山口に赴き大內氏に依り、一五五〇年の末に山口を發し翌年春京都に入り在京十五日にして平戸に歸り、更に再び山口に布敎し、一五五一年（天文二十年）陽曆十一月二十日豐後日出港を發して印度に向つた。卽ち日本在留は二ヶ年と三月餘になる筈である。この間に於て鹿兒島を始め、平戸山口堺京都

などの西國近畿地方に於て見聞した所に基いて以上の報告は作られたので、所載の記事は、事實の反映或は西眼に映じたる事相と觀るべきである。

三

シャヂエルが鹿兒島に滯留中の天文十八九年は丁度大隅伊集院氏の支族より出た九華和尚が出でて足利學校第七世の庠主となつた時である。九華は爾後三十年間天正六年八月示寂に至るまで學校を管し、生徒三千と註せられた同校最盛時代の校長である。この時代の初には北條氏が關東を服したのであるから、シャヂエルがその第一信中に記した坂東の六領主中最も勢力ある一人といふのも、北條氏であらう。九華が永祿三年六月大隅に歸らんとする途に、小田原に立寄り北條氏に伺候し氏康氏政父子に三略を講じた時、氏政より今も足利學校に存ずる金澤文庫本の文選を貰つた有名な事實もある。九華の校主時代には、かの文之和尚の師匠であつた東福寺龍吟菴の熙春も遊學した。關東の名僧天海僧正や京都の學僧要法寺日性が少時就學したのも九華時代であつた。肥前の閑室三要が初て來り學んだのも同じ人の下ではなかつたかと思ふ。名高くはないが日洲長樂寺の承貞書記の足利遊學は元龜元年でやはり同代である。

抑も足利學校と九州との因緣は頗る深く且つ遠い。島津氏の世子を以て出家して薩州福昌寺の第三世となつた仲翁守邦は、應永二年齡十七足利學校に就いて經史を肄つたことがある。これは上杉憲實の興學以前である。學校再興以後第一世の快元和尚の本籍は不明であるが、第二世以後の校長には九州人が割に多い。第二世天戈は文明延德年間の人であるが、肥後の人であつた。第七世九華は前述の通り、第八世宗銀は日向の人、第九世閑室は肥前の人といふ樣な有樣である。三世乃至六

世の鄕貫は不明であるが、これらの年代にも九州方面からの遊學僧で記錄に上つてゐるものが散見する。これは上村觀光氏が「室町時代關東の學問」と題する上中下三篇より成る論文（禪宗明治四十四年四月五月六月）に於て拾集められた事實によつても知ることが出來る。文之が幼時の師たる日向飫肥の天澤和尙が大永末年足利に學んだことがあるが、これは校主第五世か第六世の時で九華より一代前である。

斯くの如き關係の存在からして、シャヂエルが早くも鹿兒島に於て足利學校の聲譽を知つて之を重大に考へたことが說明さるべきである。又坂東の裘氣の凜烈な程度も、薩南の風土から推してさもあらうと考へ得らるゝ所である。宣敎師の報告中關東に於ける食料缺乏に關する事柄は、臥雲日件錄寶德元年閏十月三日の條に記す筑紫人大椿東遊學四書五經始聞孟子講時食不足云々の話と連想して妙味を感ずるのである。ともかくも、九華就任時代の天文十八九年に鹿兒島に着したシャヂエルは、同地の人々より足利學校に關する令聞と坂東風土の實情とを聞知したわけである。四十年前宗長の「東路の津登」に見ゆるが如く「足利の學校に立寄侍れば孔子子路顏回らの肖像をかけて諸國の學徒かうべを傾け日くらし居たる體はかしこく且はあはれに見侍り」といふ實況は、生徒蓋三千學業尤盛とある九華時代も同樣であつたらう。さう云ふ有樣は西敎の史上にも反映してをるのである。

四

シャヂエルが鹿兒島に於て勸化した二人の佛僧があつた。書簡集第八十一信（一六四頁）は同地發一五四九年十一月五日天文十八年十月六日付であるが、その中に、

二人の日本僧侶（ボンズ）、僧籍を棄てゝ基督教に改宗せるもの、本年ゴアの學林に至るべし、彼等を懇篤に待遇せられよ、宛も予が貴地にありし時、かの日本人ポールを扱ひつるやうに、

と見えてをる。同日付の別信には、右兩僧は京都（ミヤコ）及び坂東の兩大學に學んだ者である由が書いてある。然し二人は其年に渡印したのではなくて、翌年上人が鹿府より平戸に赴いた時も、翌々年京都に入つた時にも同伴したのである。印度に赴いたのは、上人が日本を去る時に隨行して往つたのである。一人は名をベルナルド、他はマチアスと呼んだ。第百〇六信（四九四頁）一五五二年四月九日付でゴアより葡國のシモン・ロドリゲーズ師に送つた書簡には、二人に關して次の如く見えてゐる。

マシウ及びベルナルドといふ日本人二名、予に隨ひて印度に來れり、これ葡萄牙幷に伊太利に赴かんが爲めなり、殊に基督教の全盛觀を仰がんとて羅馬に至らんが爲めなり、斯くて彼等は歸國の後には其の見聞せる所を同郷人に語らんとするならん、予は茲に彼等兩人を專心貴下に推薦す、

尙以下書中に二人を依賴すること懇切を極めてをる。さて其後二人は如何。成つたかと云ふと、一人は西航前ゴアに歿し、他は羅馬觀光の後葡國に歸りコインブラの學林に客死した。後者は邦人中渡歐の最初の人であつた。二人は山口に於て受洗したと西教史にあるが、然らば鹿兒島にて發心し、山口にて受洗したのであらうか、事蹟の委細はわからぬ。とにかく二人が足利に學んだ者であることは信じてよからう。

クラッセの日本布教史（西教史）によれば（上冊第五卷第十四章）一五六五年、永祿八年在京の宣教師ボレラ及びフロイスの二人が松永久秀等が將

軍義輝を殺した後の騒亂について、京を去つて堺に避難して居た時、同地にて三名の僧侶の改宗して歸依する者があつたが、その一人は、坂東の有名なる大學のドクトルで占星術（アストロロジー）に達してゐる人であつたと見えてをる。足利は易が名高いのであるから、こゝに所謂アストロロジーとは蓋し易のことであらうと思ふ。又シャールボアの日本志にも、（上編第二卷第九章）右の兩宣教師が、かの自由市なる堺に退去してゐた時分のことが記載されてゐる。彼等は坂東の大學へ誘はれたことがあつたが應じなかつたと云ふことである。

フロイスは、予の推定によれば、吉利支丹物語や南蠻寺興廢記に見ゆるヤリイスに當る伴天連である。ヤリイスは、ルイス・フロイスの名前ルイスの訛稱であることは、予の屢說いた所である。彼は一五六三年永祿六年日本に渡來し、翌々一五六五年永祿八年京都に入りてより、一五八二年天正十年の頃まで京都に居て、宣教に從事した。その後、天正の末年にも入京したことがあるが、慶長三年に至つて長崎に歿した。日本在留三十五年になる。多年京畿に在留した爲に、上國の事情にも通じたし、又信長及び秀吉へ印度總督よりの使節として來朝したヴリニャーニの記室ともなつた關係もあるので、彼の手に成つた日本よりの報告書には史料として有益なものが少くない。葡國の一圖書館に、フロイスの編した一五四九年（天文十八年）乃至一五七九年（天正七年）間の日本史といふもの寫本があるさうであるが、今之を見ることの出來ぬのは致方ない。由てマードック氏の孫引を更に借用して、足利學校に關する同書の一節を引くことにする。

日本の諸大學と云ひても、そは歐洲の諸大學に類似せりとは想ふべからず、學生の最多數は僧侶（ボンズ）か然らずんば僧侶（ボンズ）たらんと學ぶ者どもなり、

而して彼等の學業の主なる目的は和漢の文字を習ふに在り、彼等はまた諸宗派の教理卽ち彼等の神學(セオロジー)をも領得せんことを努む、尙或は聊か天文學(アストロノミー)を、或は聊か醫學(メヂシン)を修めんとす、然りと雖も教授幷に學修の方法に於ては、歐洲の諸學校に表はれたるが如き嚴密なるシステムは絕無なりとす、尙又日本には綜合分科を有する唯一の大學あり、そは坂東地方、足利と呼ぶ處に在るなり、

全文を知ることが出來ぬのは遺憾であるが、シャヂエルよりフロイスに至る西教渡來の初期、天文天正間に於ける足利學校盛時の情況は推することが出來る。足利では易學は僧俗間に權威となつてゐた。醫學にありては曲直瀨道三を出し、又田代三喜の如き關東一の名醫も一時はそこにゐたといふだけあつて、足利は醫術にも相當に名がある。さういふ點を數へれば、足利學校を日本の綜合大學と見たてたのも、面白い觀察である。

然し宣教師が東國に布教を始めたのは慶長年間であるから、シャヂエルなりフロイスなりは、實際足利を觀察して學校のことを記したのではない。從つて非常な買被ぶりをしてゐる。慶長年代ジェスキートやフランシスカン等の各社が、關東に布教を試みた時分は、足利學校は既に學校としての活力を失つてゐた頃であるのみならず、布教界の事情も、天正以前とは大分違つて來たのであるから、復た足利學校を稱揚する伴天連もないやうになつた。よしや外人の讚稱に誇張があつたにしろ、天文天正年間、九華時代の足利學校の盛名は、宣教師を刺戟し奮勵せしめる動因となつたことは爭はれぬと思ふ。然らば、關東文運の反響も亦意想外に大なるものであつたと謂はねばならぬ。

（大正八年八月十日）